

[学会印象記]

第10回日本老年精神医学会

日本老年精神医学会では、わが国の超高齢化に向かう社会状況を反映して会員数が年々増加し、わずか10年間で1000人に達しようとしている注目すべき学会である。

本年の学会は、平成7年6月1日から6月2日にかけて、宮崎県宮崎市のJA・AZM（アズム）ホールにて、宮崎医科大学精神科教授三山吉夫氏の主催で行われた。

第一日目の最初に、三山氏より、「非アルツハイマー型痴呆の臨床と病理」というテーマで会長講演をしていただいた。氏によると、臨床的にアルツハイマー型痴呆と診断されても、病理的には約20%が非アルツハイマー型痴呆と診断されるとのことであった。

続いて、聖マリアンヌ医科大学学長の長谷川和夫氏により、「老年精神医学の継承と発展」というテーマで

特別講演をしていただいた。

一般演題は、A、Bの2つの会場で、全部で87の発表が行われた。B会場では生理、生化学の領域の発表を中心であったのに対して、A会場では、患者の臨床的経過や特徴、心理的評価、介護などに関する内容が多く、医師ばかりではなく、コメディカルスタッフの方も積極的に発表しているのが印象に残った。例えば、「○○市の施設ケアの現状と課題」「重度痴呆患者ディケアの経験について」「アルツハイマー病患者の行動異常の計測」といったように、本研究科のスタッフ、学生になじみ深いテーマが多い。来年は、東京大学主催で行われる予定なので、老年医学や老人福祉関係の研究テーマをお持ちの方々は是非参加されてはどうかと思う。

(筑波大学心身障害学系 山中克夫)

第20回日本睡眠学会

第20回日本睡眠学会は福岡県の久留米大学医学部精神神経科学教室の中沢洋一教授の主催で95年6月8、9日の2日間、久留米市の萃香園ホテルで開かれた。3会場に分かれ、81の演題が発表された。中でも、睡眠時無呼吸は演題が多く、関心の高さをうかがわせた。シンポジウムでは「睡眠と体温」「睡眠障害の診断分類」せん忘をめぐっての3つが企画された。そのうちの一つである「睡眠と体温」のシンポジウムでの、REM

睡眠中の体温調節機構についての討論は不十分であったが大変興味深かった。会長講演「久留米大学睡眠障害クリニックの沿革と現状」（中沢教授）での、不眠を訴える患者に PSG 記録結果を見せ、「あなたは実際はこんなに寝ているから不眠ではない」と説得するのは逆効果である場合が多いという報告は大変印象深いものであった。

(筑波大学教育研究科 高瀬美樹)

第12回世界理学療法士学会

6月25日から30日の約1週間、アメリカのワシントンDCで理学療法士の国際学会（12th International Congress of the World confederation for Physical Therapy）が開催された。56の国と地域から開催期間中に1万3千人を超える参加者があった。日本からも過去最高の170名前後の参加者があった。

演題数は、特別講演なども含んで1208題と非常に多く、前回の1991年にロンドンで開催された学会演題数のほぼ2倍となった。また、日本からの演題数も62題と前回に比較して2倍に増えた。

6月26日の早朝8時から夕方5時まで、ワシントンDCコンベンションホールの37の会場と隣接するホテルを使って、整形外科疾患や呼吸循環のリハビリテーション医学分野を中心に理学療法士の学校教育、小児の運動療法、地域リハビリテーションなど広い範囲の特別講演や一般演題発表が行われた。翌6月27日から6月29日まで、3つの臨床講議シリーズ（筋生理解、運動学習、関節機能障害）が3日間連続で加わり、どの会場も盛況であった。私も発表の合間をぬって、運動学習のシリーズ（Motor Learning and Motor Con-

学会印象記

trol)に3日間出席したが、講演者の中には運動障害の定義が明確に区別しておらず、運動学習なのか、自然回復なのか、依然として研究の余地がある分野のよう

に思われた。また、臓器移植後のリハビリテーションプログラムに理学療法士が参加している報告があり、今後、日本でも話題となる領域であるように思われた。
(慶應義塾大学病院リハビリテーション科 三和真人)